石川南

バブル期の名物宿泊プラン

「一客一館」再ヒットを

山中・すゞや今日楼

加賀市山中温泉の旅館「すゞや今日楼」が宿泊客を1団体だけに限る名物プラン「一客一館」で誘客を図ろうと、19日までに受け入れ要件を従来の30人以上から20人以上に緩めた。新型コロナ対策で多くの宿泊施設が団体客から個人狙いにかじを切る中、バブル期に流行したプランを利用しやすくし、新たな需要を取り込む。

すゞやは33室を備え、最大200人を収容できる中規模旅館として知られる。プランは20代の頃、大阪の船会社に勤めていた須谷晋也会長(73)がチャーター船をヒントに考案した。

1986（昭和61）年のスタート時は110人を上限とし、1泊計220万円で全館貸す内容で売り込んだところ「ほかの客に気兼ねなくくつろげる」と需要をつかみ、年に60件以上の利用があった。

取引先などを招待する旅行では顧客のニーズに応えるべく、サッシ会社の場合は部屋を改修したり、ガラス会社ではコップやグラスを全て買い替えたりもしたという。

バブル崩壊後はプランの利用は下火となったが、コロナ対策を講じた上で受け入れ要件を見直した。

「新しい生活様式」に対応するため、1人1室の利用も可能とし、宿泊料金は1泊で1人2万円程度に設定した。須谷会長は「安心して過ごせるひとときを提供したい」と話した。

「一客一館プラン」を考案した須谷会長(右)　＝加賀市山中温泉

新聞紙でエコバッグ

野々市で児童15人

館の「地球に優しく・エコバッグ作り」（北國新聞社後援）＝写真＝は19日、富奥防災コミュニティセンタ

野々市市教委と富奥公民